

R3・4・15

第3号

通巻152号

学院通信

発行
金光学院
719-0111
岡山県浅口市
金光町大谷1486
TEL (0865) 42-3115
FAX (0865) 42-3114



学院・春季霊祭

「学院教育について考える」

学院長 高橋 寛志



令和二年度の本科学院生は、入学時から卒業時まで、ずっと新型コロナウイルス感染症の影響を受けてきた。広島平和集会の参加も他宗教研修も在籍外教会実習も選択別研修もなかった。代わりに院内講師による授業が増えた。その効果は祭式に如実に現れた。礼典実習といって、終祭、告別式、五十日祭、合祀祭、結婚式、地鎮祭など各種儀式を準備から実施まで自分たちで実施する実習があるが、祭式の授業を大幅に増やした結果、動きが例年に比べて格段に良くなっていた。祭式以外でも、教祖・教義などの本教の学行的な面、又、ご祈念、神習などの信行的な面も深められたのではないかと思う。

学院在学中は、せっかくご霊地にいるのだから、外に出るのではなく、しっかりご霊地で、参拝したりご祈念したりして、ご霊地のお徳を頂くことが大切だという意見は以前からあった。この度は半強制的にそういうことになったが、そのことを体験した今、それをどう評価するかを考えている。先に述べたように、本教の中身を習得するには、外に出ずに内での授業を増やす方がいいように思えるが、卒業間近の第三回修徳殿入殿では、輔導の先生から、「理想と現実の両方を捉える力が不足している」という指摘があった。頭の中で理想の信心を考え、同期の仲間だけとの狭い人間関係の中で培われた信心は、外の社会の様々な人間関係の中では通用しないということであろうか、あるいは逆に、厳しい現実にとらわれ、理想を実現していく意欲に乏しいということであろうか。

他宗教研修、在籍外教会実習、選択別研修などで実際の活動に触れることで、理想と現実の違いを捉える力を身に付け、そこから信心を練り出していくことが大切だと改めて感じた。そうしたことも踏まえつつ、今後の学院教育について考えていきたいと思う。

ご卒業おめでとう

先輩諸師からのごとば

「同期生」は宝



兵庫県・常盤木教会長
原田 恵一郎 師

私は昭和五十七年、教祖百年祭の前年に学院に入学しました。その入学式のお届けでの四代金光様のお言葉の一節は、「…お役に立つということは、お邪魔にならないことと思っております…」でありました。それを頂いた八十名足らずの同期生は、例年に無く皆元気な人たちでした。そのためか、在学中はお役に立たない事柄が多かったようです。しかし卒業後は、教団各方面で多くの同期生が活躍しております。その事実にいささか驚いています。

卒業後は、引き続き在籍教会での内弟子修行を続けておりました。そして数年後に、若気の至りで挫折し教師辞任を考える壁にぶつかりました。そこで、義

兄弟のような二人の同期生に電話いたしました。遠方にも関わらずご本部に来てくれました。私の愚痴・悩みを聞いてくれ励ましてくれました。そして四代様に取次願って教会に戻りました。師匠も大きく包みこんで許して下さいました。今や、そんな二人とは半年に一度のペースで数人を誘って同期会をしています。

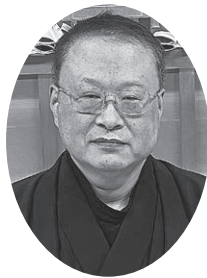


教主金光様ご退任日 お退けお見送り

す。明日の教会布教について激論しています。

教祖様の教えに、「…都合十二年お広前を勤めてはじめて先生の仲間入りが出来ますのじゃ…」のままに、「あわてず、あせらず、あきらめず、祈り祈りて」、気負わずポトポトやって下さい。

夢と希望をもって 共に御用を!



和歌山県・和歌山教会長
澤井 澄一 師

コロナ禍でのご信行は、私が学院で経験したものと全く違うものだったと思います。その様な中で、よくぞご信行成就されたと、とてもありがたく思わせていただきます。

また、学院の先生方にも、よくぞここまでお育て下さったと、心より感謝するばかりです。私は、ちょうど三十年前に学院に入らせていただきましたが、今ほど学院の先生方に感謝の心を持っていませんでした。それが、三十年経つてようやく、お育てを頂いたことが本当に分かり、心から感謝が溢れ、自身の足りなさ

を今更ながらに反省しております。

いよいよ、学院を卒業し、私達と共に教団の一員として神様の御用に立たせていただくこととなります。私には、御用させていただく中で、いつも自身の反省として、そして勇気を頂いている教祖様のみ教えがあります。

「あなた方は小さいことばかり考えているが、金光大神は、世界をこの道で包み回すようなおかげがいただきたいと思っ

ている」というみ教えです。教会で御用をさせていただいていると、小さいことについて潰されそうになることも沢山ありますが、教祖様が頂いた神様の大願、「世界をこの道で包み回すようなおかげをいただきたい」と、この大願のお役に立つ使命を持ち、ここからは共に夢と希望を持って御用が出来る事を楽しみにしております。

未来へと続く物語を



令和元年度卒業生
広島県・竹原教会
神田 道雄 師

皆さん、ご卒業おめでとうございます。これから教師任命のことを教主金光様に

願われ、許されましたら、同じ金光教の教師として共に活躍していけること、とても嬉しく頼もしく思います。

縁あって、私は信行輔導期間の後も皆さんとお会いする機会が度々ありました。ある夏の日に大半の男子が坊主頭になっていて驚いたこと、聖蹟巡拝中の芸備教会では特科生と共に熱心に話を聞く姿が大人びてみえたこと、冬に足の裏に絆創膏をはりながらも素足で参拝する姿に熱い想いを感じました。それぞれが願いをもって神様に向かい、修行に臨む姿には感極まるものがありました。

さて、今私がお伝えしたいこと。それは「無限の可能性への期待」です。未だ続くコロナウイルスの脅威、信者数の減少など不安事項が多いのは紛れもない事実です。しかし一方で、学院で学び教会修行を経て、神様と共に生きる素晴らしさを知ったからこそ、その「不安を超え」る喜びに満ちていることも実感しています。型にはまることなく、縮こまることなく、世に出ようではありませんか。願いは大きく、御礼の気持ちをお忘れずに、日々改まりをもって人助けの道へと進んでゆきましょう。これから描いていく一人ひとりの神様との物語。楽しみしかありません。

できたことに喜びを



令和元年度卒業生
京都府・伏見教会
橋本 美子 師

ご卒業おめでとうございます。

御霊地での修行はいかがでしたか。思い返せば、新型コロナウイルスの流行により入学できるかどうか危ぶまれていた中で、なんとか例年通り始められた学院生活でしたね。皆さんがこうして無事に約一年間の修行を終えられましたことを、私も大変喜ばしく思わせていただいています。感染症対策などによる制限もあり、相当辛抱されたと思いますが、多くの人に祈られて過ごした日々だったと実感していただけたら本当にありがたいです。

コロナ禍でしたから、先輩教師の学院時代の話を聞くと、自分たちはあれもこれもできなかった…と残念に思うこともあるかもしれませんが、それでも通常にできたことがあり、こんな時だったからこそできたこともあったはずですよ。まずは、できたことへの喜びと感謝の気持ちを忘れず、学院で皆さんが得られた貴重な経験と学びを今後の御用の場

で実践してみてください。神様は無駄事はなされません。できなかったという経験も含めておかげになるよう神様が導いてくださると信じ、すべてに御礼を申させていただける心になっているといいですね。

卒業後も、「生きておる間は修行中じゃ」との御理解があるように、共に永く修行させていただきましよう。



洒掃 (修徳殿)



講堂障子張り

日程

(冬期在籍教会実習後から卒業まで)

1月	2月	3月	4月
4	1	1	1
5	3	2	2
6	4	3	3
7	5	4	4
8	6	5	5
9	7	6	6
10	8	7	7
11	9	8	8
12	10	9	9
13	11	10	10
14	12	11	11
15	13	12	12
16	14	13	13
17	15	14	14
18	16	15	15
19	17	16	16
20	18	17	17
21	19	18	18
22	20	19	19
23	21	20	20
24	22	21	21
25	23	22	22
26	24	23	23
27	25	24	24
28	26	25	25
29	27	26	26
30	28	27	27
31	29	28	28

帰院式

第六回 求道の日

実践課題設定週間

教話実習②

教典研究発表

第七回 求道の日

第三回 定期考査

後期開始

礼典実習

学院長寮内巡回

教話実習③

御神米調整実習等①

第八回 求道の日

御神米調整実習等②

講堂障子張り

第三回 修徳殿入殿

御神米調整実習等③

学院・春季盃祭

第三信心レポート懇談

天地金乃神大祭並びに

教主就任奉告祭御用奉仕

学院・天地金乃神大祭

身辺整理・大掃除

卒業証書授与式

学院生活を振り返って

学院生の声

それぞれが
感じることができる神様



山口県・防府教会
安部 歓世

私は、学院に入学した頃は神様の存在に確信を持ってませんでした。それは、目には見えないし、声も聞こえないし、匂いもしないからです。しかし、同期生の方々と先生方の話を聞いている中で、自分の考えが変わっていきました。神様は、起こってくる出来事や身のまわりの事から感じ取るものなのだと思うようになりました。「おかげは和賀心にあります」ということではないかと思わせていただいております。そこから、私なりに神様のお働きを感じることができてきました。

人間は、皆それぞれに、重きを置いている所、大切にしている所が違うので、起きてきた出来事から感じることも、そ

れぞれに違います。だからそれぞれが語る神様は、似ていても、全く一緒ということはないように思います。それを強く感じた日が三月にありました。その日は、ご都合をいただき、学院長、次長、班付の先生、在籍教会の教会長である父とそれぞれお話をする機会がありました。皆それぞれが語る神様がありました。私はそれぞれのお話に聞き入ったのと同時に語り尽くすことができない神様の大きさを感じました。

これからは沢山の人が感じている神様に触れさせていただき、私自身がしっかりと神様を求め、自分の言葉で語り伝えられるようなおかげを受けていきたいと願っています。

学院入学を振り返って思うこと



京都府・鶴ヶ岡教会
倉田 真行

私は、修行生であります。寮での共同生活の経験はなく、同期生と一緒に一年間やっつけていけるか不安の中、入学しました。しかし、信行輔導期間で、OBの皆さんが、学院修行としての作法や、御用内容を丁寧に教えて下さり、さらに、

係別作業 (ご祈念帳調製)



学院・春季霊祭

そのOBの皆さんとお別れの際に、感謝を伝える会があって、その内容を同期生と話し合う中で、皆と打ち解けることができました。

今年度は、コロナ禍で、外出ができにくく、広島市出身の私にとって広島平和集会に参加できなかったのは、大変残念でした。しかし、その分学院内で過ごす時間が増え、祭式等には、じっくりと取り組むことができました。

特に、ありがたかったのは学院・生神金光大神大祭で神饌長のお役に当たらせていただいたときのことです。習礼では、

お供え物が、いつも正中から少しズレ、正中に供えることがなかなか出来ませんでした。最後まで不安が残りましたが、神様にお願ひさせていただきお任せさせていただきますと、当日はピシッと正中に供えさせていただくことができました。さらに学院・天地金乃神大祭では、祭主の御用をいただき、おかげを蒙らせていただきました。

ここからは、在籍教会でさらに修行させていただき、将来は、布教に出させていただきますと願っております。

何事も喜んで



鳥取県・米子教会
河合 道子

私は一年を通して、何事も喜んでというのを大切に修行させていただきました。なかなか、そう思えないこともありましたが、取り組む中で、いろいろな学びせていただくことができました。

特に、後期の信行目標である「神の願いに生きる」に取り組むにあたり、神様が自分にかけてくださっている願ひを考えている中で、大切なことに気づかせていただきました。それは、今まで起こっ

た事柄、これから起こる事柄のすべてが神様のお差し向けで、それだけでなく、すべてに神様の願いがかけられているということなんです。そのことに気づかせていただいているから、それまでは気にも留めなかったような事や、不平不満を持ってしまおうような事にも、喜びの心を持つことができようになりました。

すべての事柄が神様からの、ありがたい尊いものであり、神様は、自分に願いをかけてくださっているのと同じように自分以外の全ての人にも願いがかけられているのだと思います。ですから、その人の思いや考え、その人自身をもっと大切にさせていただかなければならないと思わさせていただきました。

ここからも、御用はもとより、日常の何気ない事も、そして人との関係も、喜びで一杯になれば大変ありがたいと思っています。

いいようになる道



兵庫県・姫路教会
竹部 澄香

後期に入ってから、私は卒業後の道をなかなか決められず、不安で焦っています。

した。AかBの道どちらがいいのか。どうやって決めていいのか分かりませんでした。私は「神様、どちらの道を選べばいいか分かりません。どうぞ教えてください」とそのまますまをお願いしていました。

ある日、同じ学院生の方と一緒に調餼の御用をしていると、その方は私には理解できないような危なっかしい盛り方をしていました。私は「そんなことしたら崩れるのは目に見えているのに」と思いました。しかし、そこをぐっとこらえて時間をかけて見守っていると、なんとも言えない絶妙なバランスのお供物が出来てきました。見通しが立たないと不安になる私からするとこの体験は衝撃で、分からないけどやってみよう、最後はいいようになることを、身をもって体験させていただきました。そこから私は、AとBどちらを選ぶかという見方ではなく、わが心を神様に向けていけばAとBどちらを選んでも納得できるような気持ちの持ち様に神様がしてくださる、そんな出来事を差し向けてくださるから、それを安心して待とうという見方になりました。

これからのいろいろ迷うことは出てくると思いますが、そういう時こそ、神様に心を向けて進ませていただきたいと思います。

「いままでの歩み」

第六・七・八回「求道の日」



求道の日 (神習)

学院生活の基本に立ち返り、自己の信心を正していくことを願い、原則として月の朔日を「求道の日」と定め、一日のはじめに教主金光様のお出ましを迎えさせていただきます。終日黒衣で過ごし、講話、共励、覚筆写、徒步行等を実施している。

第六回は、覚筆写と、冬期在籍教会実習の内容をもとにした個別懇談を行いました。第七回は、岩崎道與教務総長にお越しいただき、午前中三時間、令和三年度の「教団の願い」である、「教祖様の『神人物語』をお手本に、それぞれの『神人物語』

を編む」の内容について学院生に向けてお話をさせていただきました。また、午後からはお話をもとに、共励会を実施しました。第八回は、午前中、「回生の冒険者 崔宰漢」を鑑賞し、午後からは、本部広前で神習を三十分行なった。

■教話実習

教話実習は、教師の素養の一つである教話の力を身につけることを願いとして実施しており、今年度は三回の実習を行なった。第一回、第二回はグループごとに分かれて実習と反省をし、第三回は、第二回で行った教話の内容を懇談、検討して改稿、清書したものを学院生全員の前で発表した。学院生は、教話の作成、実習、反省を繰り返す中で、信心の在り方や自分にかけられた神様の願いや思い、また、神様のはたらきを見つめ直し、深めていくことができた。さらに、この度は、全員の教話を聴くことができ、同期生の信心の新たな一面を知ることにもなり、そこから自分の信心を見つめるきっかけにもなったようである。



第3回教話実習

■礼典実習

礼典実習では、「祭式」及び「祭詞」の授業で習得した基礎的内容をもとに、葬儀式、五十日祭並びに合祀祭、結婚式、地鎮祭の各諸祭を、乾物、野菜、果物などを調饌し、実際に祭服を着て祭員を務



礼典実習 (告別式)



礼典実習 (地鎮祭)

め、本番に近い形で執り行った。学院生全員がいずれかの諸祭で祭主を務め、自らが起草、浄書した祭詞を奏上する貴重な機会ともなった。この度は、新型コロナウイルス感染防止のため、一月に他宗教研修や選択別研修が実施できず、院内で授業実施したため、「祭式」と「祭詞」の基礎的部分を理解し、基本作法をしつかりと身につけているものが多く、各諸祭の意味合いや次第の確認に重点を置くことができ、実際の設えを時間内に皆で分担して整える中で、少しでも良い祭典となるよう心を配る姿が見られた。在籍外教会実習も実施できないことから、この学びを現場での御用の中で活かしていくのは、卒業後となるが、コロナ禍で多くの実習や外出が制限される中で、この度、実施できたことを学院生も喜び、真剣に取り組めたことがありがたかった。

■御神米調整実習

本部広前の修行生として、本部広前における御神米調整の基礎を学ぶとともに、その御用に触れさせていただくことを通して、お道における御神米調整に対する心構えを学ばせていただくことを願いに、御神米調整実習を実施した。

従来、選択別研修にて行っていた実習であるが、この度は本科生が三グループに分かれ、それぞれ二日間ずつの日程で



「奉仕」研修 (車椅子研修)



御神米調整実習

全員が実習に参加した。

実習では、広前部御神米調整室のご指導のもと、一日目はお剣先折り、二日目はお米よりと上包みを折る行程を体験した。慣れない御用であったが、それぞれが真剣に取り組み、本部広前からお下げされる御神米に対しての思いを新たにしたいようである。

なお、御神米調整実習に向かない二グループは、学院にて、「奉仕」研修、「取次研究」を行った。

■修徳殿入殿

第一回(九月)、第二回(十二月)の入殿を受け、第三回入殿は、「学院卒業を間近に控え、お道の教師にお取り立てを願おうとする者としての御用のあり方や決意などを改めて自覚する」という願いのもと実施した。今回の入殿は、今までよりも一日長い二泊三日型の入殿であり、輔導・副輔導の教導を頂き、また、修徳殿という場のはたらきの中で、より深く自己を見つめる機会となった。その中で、これまでの学院生活を振りかえり、卒業後の自身のある方について、新たな気付きやここから取り組むべき課題等を確認できた。



第3回修徳殿入殿